

王羲之の書芸術

岡 藤 淳之輔

一、序論

王羲之は、書道史上最も重要な存在であり敬意をもって「書聖」といわれる。

彼の書芸術は、まずその第七子、王献之によって継承され、父子並んで二王といわれている。さらに七代の孫、隋の智永に継承され、更に唐代において太宗の熱烈な支持推奨のもと、いわゆる初唐の三代家―虞世南・欧阳詢・褚遂良―による新時代的な洗練整備をうけ、世にいわゆる楷書の極則が完成される、ここにおいて王羲之を宗とする中国書芸術の地歩が確立し、以後の書芸術に空前絶後の感化を及ぼすに至る。このようにみてくれば中国における書芸術の展開は、王羲之を中心とする支派繁衍の歴史とも言えるのではないかと思われる。

王羲之の
樂毅論

而難通然後已焉可也今樂氏之趣或者其

「樂毅論」

而難通然後已焉可也今樂氏之趣或者其

光明皇后
が書かれたもの

この光明皇后の樂毅論は書さぶりや各行の字詰めが同じであるため王羲之の臨書されたものといわれる

一方 我が国においては、奈良朝における光明皇后、聖武天皇の御筆蹟などにも極めて顕著な王羲之の書の影響が看られる。また万葉集における「羲之」を「てし」と読む訓話などによっても、奈良時代こそはまさに王羲之風の書の全盛期、また中国かぶれの時代と言うことができる。

〈伝藤原行成臨本〉

初月廿五日羲之於此年
 感懷筆意云々
 永思弥深田極難居矣
 心不盡力及不
 次之義云々

王羲之の尺牘初月廿五日帖

つぎの平安時代における空海や最澄、あるいは三蹟―道風、佐理、行成、等の書に看られる王羲之の書の根強い影響など、注目をひく。また当時、いかに王羲之の書がよく学ばれたか、小野道風の「秋萩帖」の巻末にある伝藤原行成臨「王羲之尺牘」などがあげられる。

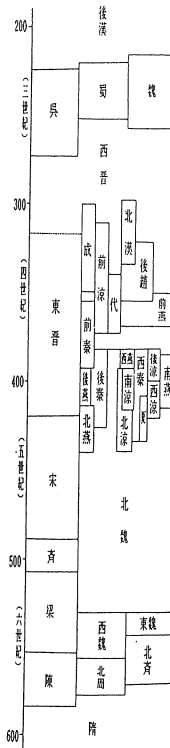
日本の書芸術の展開は、源流をたどればまさに王羲之の書の芸術にあったと言う見解が充分に成立し得ると思われる。

以上王羲之の書芸術が中国及び日本の書道史に占める重要性和その影響の偉大さを考えてみたが、それならばこのような書道史的地位と役割をもつ彼の書芸術とは、如何なる特質をもち、それはまた、王羲之という一角の人間のいかなる生活と構造の上に成立しているであろうか、現在の彼の文章、書翰（尺牘）を主要な資料として若干の考察を加えてみたい

と思う。

二、王羲之の時代的環境について

王羲之の書の特質を考える前に、その書芸術の出現がいかなる時代的環境を背景とするものであったか考えてみたい。彼の出生は西暦三〇七年西晋の恵帝の永嘉元年であるといわれる。



晋は多くの皇族諸王を封じたか、内乱が生じそれぞれが勢力保持のために異民族の武力を利用した、その異民族が強力となり、内乱に乗じて自立した匈奴が五二年続いた晋を滅ぼした（三二六）匈奴のほかに、西方、北方の異民族が内地に移り住むようになり、漢民族と雑居して勢力を広めたのは羯、鮮卑、羌、氐族であり、五胡といった五胡の異民族によって中原地方（黄河の中流、下流地方）が支配される中、次々と小国が興亡した。約一三〇年の間、一六の国が興亡したため五胡十六国という。中原の地を追われた晋の貴族豪族は江南の地に移住、滅ぼされた晋王室の司馬睿（二七六―三二三）（東晋第一代王、建康（南京）を都に定めて帝位につき、晋を復興した）は名族王導（二六七―三三〇）（晋の政治家元帝、明帝、成帝に仕えた功臣王羲之の従子、一族には能書家が多い）らの助力を得て建康にて即位した（三一七）前の晋を洛陽に都していたことにより西晋といい、建康で再興した晋を東晋という。

司馬睿が帝位についた年、羲之はまだ十二歳の少年であった。彼は父や一族の人たちとともに、北方からの苦しい旅をつづけのち、揚子江を渡り、ようやくに南の地にたどりついたと思われる。従って彼の青少年時代は、中国史上、西晋末

東晋初期と呼ばれる漢民族にとっては誠に苦難にみちた激動の時代であったにも拘わらず、精神的（彼は道教信者）もしくは芸術史的にみれば、この時代はむしろ極めて興味ある時代であり、また稔り多き時代であったとも思われる。

それはまず、漢時代以後における楷、行、草の発展であり、紙墨類の進歩改良である。

このころ西域出土の木簡や残紙の類の研究によっても明らかのように漢代以後は篆隸よりさらに簡便な、より一層表現に自由な諸種の書体が日常の通用文字として活発に用いられた。この崩れの動向こそは、一瞥すると漢代に官僚社会のイデオロギーとして成立した儒教は、漢の統治がゆるみ、やがて魏の曹操が実用主義に立つて人材登用を断行すると、次第に形式化、内容も変化してきて思想、文学がにわかに活気づいて老莊思想が色めいた。



李白文書

漢の草書から王の書へ移行していく姿

それは魏晋王朝の政権争奪の抗争のつづく中で、人間本来の自由と権利を主張する隠者グループである竹林の七賢によって代表される。

かれらは毎日、竹林に集まって酒を愛し、琴をひいたり詩を吟じたりしつつ、人間自然のままの生活への回帰を論議する。陳留の阮籍、譙国の嵇康、河内の山濤をリーダーにして沛国の劉伶、陳留の阮咸、河内の向秀、琅耶の王戎ら七人としての清談は魅惑的であったといわれる。

道家の思想は、人間の欲望につらなる政治や道徳は外部からの規制であるとして、自然への復帰を唱え、彼ら七人のみ

ならず肉親相争つての権力闘争の世界から逃避しようとする人にとって、道家の哲学に身を寄せることは必要であつたと思われる。竹林という政治的真空地帯にたてこもつて、抗争のいづれにも属せず、それも一種の政治的意志表示であつたといえよう。また文学においてはかの魏の文帝の「文学は経国の大業にして不朽の感事なり」という文学自立性の力強い宣言がありまた書に關した論著非草書後漢の趙壹ちよいつつの撰へ当時流行していた草書を非難したものゝ趙壹は、草書は本来の実用的速書性を失い、裝飾的技巧にはしつたことを批判しているが実用的な新書体として誕生した草書に、芸術的価値が見出され始めたことを物語るものである。つまり「非草書」は著者の意図に反して、皮肉にも草書の芸術性の高まりを証明したことになるのである。杉村邦彦「書の生成と評論―中国書論史序説東洋史研究二十五卷二号」や、衛恒えいこうの「西晋、元康元年（二五二―二九一）山西省の人王羲之を指導した衛夫人は從姉」四体書勢しだいしよせい、古文、篆、隸、草の書体について、その体の由来を説いたもの、撰者については、篆書・贊さいようは蔡邕さいいふの作、草書・贊は崔瑗さいえんの作四体書勢は、書論としても原初的な形態をそなえ、後代の書体論の先驅とみなされる。

つぎに南遷後の東晋社会について考えてみる。東晋王朝もその建国の初期においては、北方と鋭く対立していた。しかしその後、次第に貴族としての豊かな経済的生活に保障されつつ、氣候温暖、風光明媚な地理的環境に自ら深く順応していった。中でも王羲之は会稽かいけい内史として官にあること四年、退官後における晩年の自適の生活約十年、前後十数年にわたつてこの地を生活の場として暮らすのである。このような恵まれた自然的環境が、王羲之を中心とした東晋の書芸術文化に大きな影響を及ぼしたであろうことも推察される。

このような時代環境を背景として完成された書芸術とは如何なる点を特質とするものであつたか、考察してみたい。

二、王羲之の作品について ②蘭亭叙

最初に問題となることは、その第一条件である彼の作品―真蹟が、今日何一つとして存在していないという点である。

従来世に伝えられている王羲之の書なるものは、※搨摹本を除いては、その殆んどが宋代以後、転々と翻刻と翻刻を重ねた刻帖の類であって、つまびらかに考察すれば、王羲之の書の真実性は幾重ものベールに厚くおおわれているといわなければならない。それで、今はとりあえず、われわれが本格的に行書を習おうとする場合は「蘭亭叙」か、「集字聖教序」



ほんものの上に
↓うすい紙をのせ



ふちを写しとる
↓(雙鉤という)



墨でぬりつぶす
(填墨という)

※搨摹^{とうも} Ⅱ 双鉤填墨^{そうこうてんぼく}の技術で模写すると当時は技術もりつぱで真跡とほとんどちがわない

がよいとされている。王羲之といえは蘭亭叙、蘭亭叙といえは王羲之といわれるほど有名である。蘭亭叙は文章もりつぱであり長さも手ごろためへ二八行、三二四字、漢文の教科書や、高校書道の教科書に採用されている。

現在われわれが見る蘭亭叙は、肉筆ではなく拓本^{たつぽん}といい、石に彫りつけた字に紙をあてて搨^すりとったものである。しかも、その字さえ王羲之の字ではない。王羲之の書いた肉筆のほんものは、唐の太宗へ王羲之の書を酷愛してその書を求め、その数二二九〇紙におよんだといわれるは王羲之の肉筆を初唐の三大家に臨書へ手本を見て書くこととさせた。現在残っ

永和九年歲在

永和九年歲在

永和九年歲在

永和九年歲在

唐の名人により臨書された一部

ているのは、臨書の方である。蘭亭叙にはいろいろの種類があつて、その数が二〇〇または三〇〇あるといわれている。主なものを挙げると定武本蘭亭叙 唐の歐陽詢の臨書したもの、神龍半印本蘭亭叙 唐の褚遂良の臨書とされているもの、帳金界奴本 褚遂良か虞世南の臨書といわれる。では蘭亭叙の真跡はというと太宗皇帝が臨終の際に「自分といっしょに埋葬するよう」といって、死んだといわれている。したがって、この世から真跡はなくなってしまったといわれる。現在想像される王羲之の蘭亭叙は、王羲之時代より技術的にかなり洗練された初唐時代の人たちの書いた臨書作品より素朴ではなかったかといわれている。

晋の永和九年（三五三）三月三日に会稽山の蘭亭に集まり祓禊の礼、曲水の宴を行い、酔っぱらって、いい気分になつた彼は詩を賦した。

その詩集の序文を羲之が撰書したのが蘭亭叙である、羲之は鼠鬚筆で黄絹に草稿を書いた。その後、更に数十度書き改めたが、遂に草稿以上のものはできなかった、草稿を書いた時には、神助があつたものと信じ、羲之自身傑作として子孫に伝えた。

この蘭亭叙は、三段に分けることができる第一段：当日の会の様子を述べこの序の中心である 第2段 夫人之相與俯仰一世、夫レ人相與ニ一世俯仰スルヤ 俯仰Ⅱこの世に人が暮していくにあたりては、つまり生と死についての羲之の考えと懐い まとめ第三段は故列叙時人 故二時人ヲ列叙シテこの日の懐いを後の世の人に伝えるために、集まった人々の名とその詩を記録することを述べている。

羲之の生と死についての考えを、この序から考えると「生きているあいだがすべてであり、死後の世界は考えられない。それは悲しく辛いことである。しかたのないことである。」というものである。それでは、どのようにに此の短い一生を生きるべきであると羲之は考えていたのか。恐らく、生きている時を充実させるほかに方法は無い。という結論に達したにちがいない。

蘭亭の会では、あわせて三十七篇四十八首の詩が作られ、それぞれに此の日の懐おもいが詠うたわれたと思われる。その詩の中でみられる羲之の主張は、「人は此の世に生まれて死んでゆく。それはどうすることもできないきまりなのだから、宇宙、自然を貫通する道理、真理を悟り、それに順って生き、そして死んでゆこう。そうして、今のひとときを心から楽しむように努めよう。」ということである。

天地自然の中に流れている道理を悟ってそれに身を任せ、生き、死ぬ、しかし、命のある間が全てであるから、今のひとときを大事にし、楽しんで可能なかぎり長く生きてゆきたい、というのが羲之の考えのようである。

中国の蘭亭研究家の余雪曼しやせつまん氏はいわく「私はこの蘭亭叙の技法を書くについてもまたこれを学ぶ人びとに翰墨の功多く、進んで妙境に入り、古人と齊ししくなり、さらに古人を超越して、書道芸術の天地に一條の新路をきり開いてもらいたいと念願する。

一九六九年香港にて

余雪曼しやせつまん

二 王羲之の作品について

① 集字聖教序しやうじしやうきやうのじよ

集王聖教序は正しくは大唐三藏聖教序と呼ぶべきものでその碑文の内容は唐の太宗文皇帝が玄奘法師の新譯の經典のために製した大唐三藏聖教序と、おなじく唐の太宗が玄奘法師の謝表しやひやう（君恩に対するお礼の上奏文）に対して答えた勅と、そのときの皇太子、のちの唐の高宗の製した述三藏聖記とおなじく唐の高宗か玄奘法師の謝表に対して答えた勅、および玄奘法師の翻譯した磬若波羅密多心經からなっている。碑文の文字は弘福寺の沙門懷仁えにんが王羲之の書を集めたものであるから世に集字聖教序とよばれる。

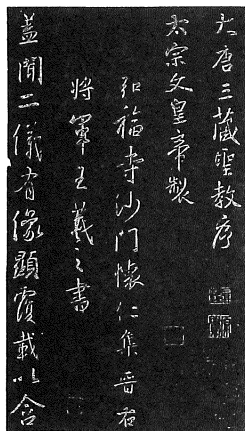
懷仁が王羲之の行書の材料としてもちいたのは、唐の王室の内府に所藏されていた多数の真蹟であつたことはほぼ誤りがないと思われる。懷仁がそれを借りて摹写をしたのはもちろん一年二年では十分ではなかつたであろうか現在する王書

から考えると、この材料の筆頭にかかげるべきものは蘭亭序と思われる。王羲之の刻帖から聖教序の字体と通ずるものが少くない。そのほかおよそ行草体で書かれた王書の尺牘（手紙）からは随所に聖教序と一致するものがある。しかし法帖に刻されたものは多くくずれているので直接真蹟を用いた聖教序の方に純粹なすがたが見られると思う。この聖教序の真蹟としての価値が低くないと考えられる。

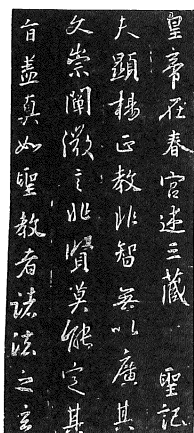
碑文は一九〇四字ある。その中でも「之」五十三字 無、而（三九字）不（二四字）以、於（二〇字）、心、流、道字は（九字）これら重出したものをのぞくとおよそ七百七十字になる。この程度のことであれば王書から集めることは材料さえあれば至難であるとおもわれない。結局集字の困難さは内府に所蔵された真蹟から一字一字厳正に選択されて行ったところにあると思われる。

つぎに、集字聖教序の字形について

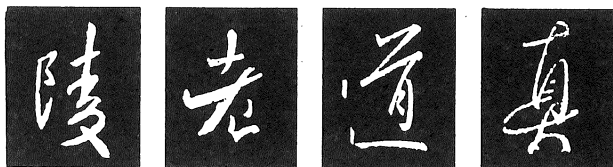
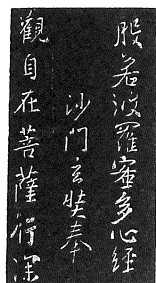
聖教序叙最初の部分



述三蔵記



心 經



画を向勢にして文字の中に大きく空間を包んでいる。

首の五画目を短くし、ことの間を広く見せている。

聖教序の中では特異な文字画がすべて離れているが、何か魅力がある。

つくりがへんに対して極端に下がっている。



頭が大きく下部は押しつぶされそうである。印象深い文字。

上の四文字は聖教序の文字の重厚な字形の中で軽快な姿の文字と思われる。用筆呼吸から王羲之の書を見定める。

右の字形の抽出により考えられることは、書風が統一された中での一字一字のさまざまな書きぶりを見ることができ、蘭亭叙についても考えられることであるが各文字を仔細に観察することにより、とくにその筆の扱いを中心に、何を学ぶか考えてみたい。

筆づかいを考える上で、はちのん八面露峰はについて考えてみる。「王羲之の書法は八面露峰であり羲之を継承した大家は、この八面露峰を守っている」といわれている。八面露峰というのは、書くときその文字の時々によって穂先が自由に動き、円筆、方筆をあわせ持つことによって、筆の扱いがバランスのとれたものになる。運筆の速度とからみながら、起筆の突っこみや筆の抑揚、開閉など、筆力を失わない自由な筆使いのテクニクと思われる。

集字であるから不自然さがあることは否定できない。先に実例をあげて述べた字形は一見凡庸であるが結構は実に論理的で実が深い。へんつくりの組み合わせもバランスのとりに妙がある。無理と無駄がなく、平凡なようで単純ではない。現在、書の展覧会で多くみられるのは王鐸（明清の作家、現在資料が多い）の調子によくみられる。その調子は羲之を

基調としたものが多くみられ、彼の感性がダイナミックな表現につながっていると思われる。

王鐸 目 近 午 帆 氣



書の研究の上で一家をなすまでには、試行錯誤や紆余曲折を経て一つの目的らしいものに達するものであるが、学習には自分の好みとするものと基調となるものをうまくかみ合わせ、更にそれに関するルーツを探究するよう努めては如何と思われる。

王羲之の作品について ㊦十七帖

草書体の書簡を集めた法帖、王羲之の書簡を二十九通ほどを集めて一卷としたもので、そのおおかたは羲之にとつては生涯にわたっての信頼するに足る友人 益州刺史周撫にあてた書簡といわれる。

「帖」には、とじた冊子さしをいう場合と、手本というぐらいの意味で法帖という場合とがある。「十七帖」は帖仕立ではなくて、巻仕立であるから、後者の意味の帖である。

冒頭におかれた一通の書き出しが「十七日先書、云々」よりはじまり、この「十七」をとって二九帖全体の標題としている。

内容は、周撫の安否を問うた相聞の手紙であるが、じつはかれの発明した仙薬ふくしの服食ふくしの奨励とそれについての問診もんしんであった。これらは仙薬の服食によってむしろ生まれた身体の気力回復のための滋養の果物であった。

その書翰の内容は大きくまとめ

・服食・薬・蜀地の産物とか遺物についてや・旅行のことなどである。

・十七帖に見られる行の流れと問題点

。尺牘せきとくであるのになぜ独草体であるか

他の喪乱帖そうらんしやう 孔侍中帖こうしちゆうしやうにしても、大方独草へ一字、一字切っている。さっきの楼蘭発掘の尺牘（手紙）も独草が多い、

楽しく書いているから、もっと続けて書いてもと思われるが。

。最小の画数

十七帖ほど画数の少ない草書を見ることはない。文字を最も簡略に書こうとする場合ほとんど王羲之の草書によらねばならないすべての羲之の草書に照らしている。どうして王羲之の草書だけが、燦然として存在したのだろうか、それはつまり羲之以上に文字を簡略化する人がいなかったのだろうか。

。文字の大小

十七帖の字間の変化

図1

十七日 先書 郝



図2

四字連綿

以 年 老 甚 欲 興 足 下 為



最初の邨司馬帖（王羲之の妻弟）図1十七日と三字を書き、広めの空間をとって少し頭でっかちに先が書かれる。つぎに書の一画目を強くつつこんで左に傾け邨のへんをうけて最後の点で一つの流れをとめる。六字しかないが逆さ字になっている。図2は十七帖の最後の虞安吉帖のところ（不）以年老。甚欲興足下為下寮 年老を以てせず。甚はだ足下の為に（下僚）と為らんと欲す（年老しているにもかかわらず、あなたの下で役人になりたいと言っていました）狂草を思わせる四字連綿のあと、欲：為を五字をバラバラに散らしているが字間の変化の一方法

文字の大小
楷書のように同じ大きさに書いたのでは、邨竹帖図3の最初致邨竹杖皆至

邨竹杖を致せしを（得たり）皆な（至る）邨竹は四川省の邨山に産し、節の高い、中心の充実した竹の一種、名産の一つとして知られている去年の夏、あなたがお送りいただいた邨竹杖はみんな届きました。偏傍からなる文字が四字つづく、ここで大小を巧みに使っている。そこで単調になるのを最後の皆を小さくすることで解決している。この皆が画龍点睛の役目をもっていると思う。

図3 致 邨 竹 杖 皆



図4 吾 前 東 粗 足 作 佳 観 吾



行間の処理

図4 吾前東粗足作佳観吾 逸民帖の最初の部分 吾れ前に東し粗ば佳観を作すに足る。私はさきに東方の地へ行きあらまし美しい景観をたのしむことができました。三字目四字目東粗を結んでみると弓状ができと思う。この尺牘はちょうど誰もがもう一度官途につくようすすめたのに対する返事と思われる。永和十一年、王羲之の四十九歳のころと思われる。書は郗司馬帖（書き出し）とよく似ている。

図5 積雪疑寒帖の、中の常冀来夏秋或復得（足下）常の（如き）にや、冀わくは来夏秋の間、或いは復た足下（の間を得んのみ）できますならば来たる夏から秋の間に、あなたのお便りを頂戴したいものです。

図5

常 冀 来 夏 秋 間 或 復 得



この行は一七帖一三四行の中でもっともうねりの激しいところである。文字の傾きともいわれるが前述の行間処理ということも考えられる。一見不揃いにみえるが、ポイントが巧みに交じりあって一行一行が立てられているようである。ごく自然にこれらの技術が駆使されて嫌味がないのは王羲之の崇高な人間性から出ているのかもしれない。



十七帖の中では図6 来禽帖だけが楷書で書かれている。伝来も古く、信頼性の大きい十七帖に収められているものだけ、

王の楷書として注目されてよいと思われる。わずかに四行にすぎないが、鍾繇の書に見られるような古拙さがあり、王書の真相を知るのに役立つことと思う。王の楷書は現在わずかに 楽毅論 東方朔畫贊 黄庭経など数帖しか見あたらないから。

来禽帖 青李 すもも 来禽 りんご 桜桃 さくらんぼ 日給勝 ?
 来禽帖 青李 すもも 来禽 りんご 桜桃 さくらんぼ 日給勝 ?
 子皆蒙盛為佳。函封多不生。

これらの種はどれも袋づめのほうがいい。箱づめであると多く発芽しない。

王の晩年における蜀の名物に対する関心を示したものと思われる。

王羲之とその尺牘

古来、書の手本の中心は尺牘である。行草書は尺牘のために生まれ、尺牘とともに発達したといっても過言ではない。

漢書の陳遵伝に「人に尺牘を興うれば、みな臧去（しまっておく）して以て榮とす」とある。キリス紀元前後のことである。これが法帖のはじまりである。その起源は一世紀より前にあり、王羲之の時代は一つの極盛に達したことは、文献に明証がある。尺牘とは一尺の牘である。牘とは木の札（はく）のことで、書版ともいう。

紙というもののまだなかった漢代までは、手紙は木片に書かれた。そして漢末から魏晋にかけて、漸く紙が普及してゆく。

前にも述べたように今日つたえられている王羲之の書は、おびただしい数にのぼるが、その中の大部分は日常の行草で書かれた手紙である。格式ばった内容の手紙もあるが普通はみな平凡なことで書かれた日常往来のくだけたものである。その内容も通俗な病氣見舞とか弔問とか、ほんの一寸した用件のようなものばかりである。政治に関するものもあるが、その数は少なく、やはり安否を気づかう見舞のものが圧倒的である。王の書は大部分が近親の人々にあてたものである。近親の人々が王の徳を仰ぎ慕い、書が上手であつたから、大切に保存したものが一まとめになつて伝えられ、それが断簡だんかん（きれぎれの文章）（短い文章）になり、これを学んで手習いをしたりしたものらしい。

王羲之は家庭にあつて家長として、責任感の強い慈愛にあふれた人物だつたようである。子や孫たちは羲之を敬い慕い羲之はまた子や孫たちを可愛がつて、たがいにたえずその安否の消息をかわしていたようで、情愛があふれるばかりにえがかれている。また知己との交友の面にあらわれ忠告、よろこびなどもその性格のよくあらわれた面をうかがうことができる。

さて、王の真蹟が全く伝わっていないとは前に述べた。しかし、真蹟に近いものとして喪乱帖そうらんじょう、孔侍中帖こうじちゅうじょうが知られる。喪乱帖そうらんじょう 京都御所東山文庫に現蔵する御物で、軸装されている、奈良時代に舶載はくさいされたいが詳細不明。行草体で書かれた尺牘で随代以前の搨摹本たくもほん（敷き写したもの）といわれている李拍文書りはくもんじょ（四ページ）は王の生存年代の真蹟として書法の上でもおおいに注目されたもので三二八年に書かれた、王が二〇歳の年の作品である。

これらを並べて比較すると近似性が認められる。西域樓蘭に出土した書と、南朝東晋の王羲之の書に共通性があることは、その距離から想像できる文化性の違いから考えれば、驚くべきことである。羲之頓首につづけて、「喪乱の極み、先とおのの墓は再び茶毒ちどくに離りぬ」と書きはじめられている。かくして、華北の奪還とつは東晋に生きる人すべてにとつての悲願であつた。それは聖地パレスチナの奪還をめざす十字軍にもにている。

義之頓首表亂之極
先墓再離荼毒退
惟破甚痛慕摧絕
痛費心肝痛皆盡

喪亂帖

二謝面未嘗遲誣良不
靜義之身三子存
想卻兒悲佳前名者第
心正遂必汝為名

二謝帖

得示之字不勝其時
吾之身一明日出乃
不須觸霧物也
敬之義之

得示帖

この帖名は初行の「喪乱之極」によるが、実は三通の書翰の名前である。つまり最初が（喪乱帖）にしゃじょう ついで二謝帖終四行が（得示帖）とくじ というが二謝帖は断簡の寄せあつめで文章は通じない。口語訳をすると喪乱帖では羲之頓首天下大乱のきわみ、先祖の墓がまたひどい目にありました。追思すればあまりにひどく、大声で泣き慕い、心はこなごなに碎けんばかり、悲痛な思いがはらわたを貫きます。…以下略 得示帖 お手紙を受け取り、あなたの健康がまたすぐれないことを知り、あれこれ心配しております。私もまた加減がよくありません。明日は太陽が出てから行きます、霧に触れたくないからです。：

原跡の書写年代について、故西川寧博士は永和十二年と推定され羲之晩年のものとも確かな作とみなされている。また元日展審査員前衛書家の宇野雪村先生は用筆法より分析し、右旋回運動と左旋回運動それに振り子運動の三者が渾融するところから、円満美麗な書風を生じると説かれている。

頻有哀禍也切
割不能自勝云云
少少増成

哀禍帖

九月十七日羲之報孔
孔侍中書甚悉不
能領軍疾後

孔得中帖

孔侍中帖
こうじちゅうじょう

二通の書簡哀禍帖・孔侍中帖・憂懸帖の三通を一軸にしたてたものを孔侍中帖といっている。

この帖も搨摹本（双鉤填墨の技術を用いて模写すること）三通の書翰をいまは軸装にしてある。正倉院の故蔵。国宝指定の名品である。搨摹そのものは、原本から、直接なされたとみられ、喪乱帖同様、真跡と見まごうほど精巧をきわめ、王法を伝える精緻な作品である。三帖の書風には差がある。〈哀禍帖〉の振幅の大きさ〈孔侍中帖〉の骨力の強さ、憂懸帖の重厚さといった点である。しかし総じて、一字の結構は頭部を重くするか大きく広くとする王法独特のかまえであり、抑揚をつけ運筆の使転にしたがって造形されていくという心手合一の境地である。

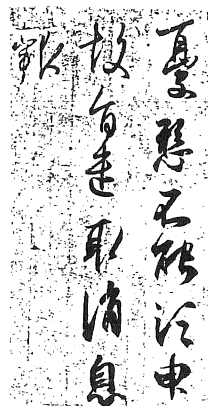
口語訳

哀禍帖 不幸がたびかさなり、悲しみにうちひしがれ、胸もはりさけ、こらえようもありません。どうしましう、どうしましう、慰めのおこたばを見ると哀感がつります。

孔侍中帖 九月十七日、義之お知らせします。朝、孔侍中の使いの者に託してお便りしました（中略）王治の病気のその後の消息は知りません。

憂懸帖 憂いにまどわれて片時も心からはなれることがありません。だから使いの者をやってお便りを求めさせます。義之お知らせします。

行穰帖（足下行穰九人還） 草書二行・一五字、小品であるが、揚守敬は「沈厚適邁、軽きものはこれを重くし、重きも



憂懸帖

のはこれを軽くす、これうまさに王の最上の名品なるべし」といつている。

清朝内府にあったが一九五九年に画家の故張大千が香港で購入し、一時はわが国にもたらされ、六二年に複製がつくられた。がその後、台湾を経てアメリカへ渡り、いまはプリンストン大学に蔵されている。

行穰帖



足下行穰。九人還示

應決不大都當佳

書き下し文 足下行穰す。九人還りて示す。応に決すべきや否やと。大都當に佳なるべし。

口語訳 あなたは領内の作柄を視察に行かれた。九人が戻ってきてあなたの意見を示しそのように決めてよいかという。大旨それでよいでしょう。

王の細楷の代表作品

王の楷書は現在残っているものは、いずれも細楷といって、小さく書かれた楷書の作品ばかりである。樂毅論がっきぎん〈がくきろん〉とは書かない。黃庭銘こうていきやう 東方朔画贊とうほうしやくがさん 孝女曹娥碑こうじよそうがひ（そうがのひ）としてもよい があるが、これらの代表的なものといえは樂毅論（冒頭に掲げた）へ光明皇后の臨書といっしよに。〉と思われる。

・樂毅論は（三四八）永和八年の王書の作である蘭亭叙より五年前に書いたものと思われる。

これは、魏の夏侯玄かうけげんという人が、戦国時代に燕の昭王の幕僚として活躍した樂毅將軍について書いた人物伝を王羲之が細楷で書いたものである。しかしこの樂毅論も、その実物の伝承のことになるときわめてあいまいである。

これは直接石に書いたものであったため、唐の太宗が王の書を集めたとき、ほかの物すべては真跡であったのに、これだけ石に刻んだ物であったといわれる。

。黄庭経 こうていぎょう

永和十二年とあるので蘭亭叙より三年後王の五十歳の書。王が山陰の道士に与えた書で仙薬服食と不老長寿の養生訓を書いた。

黄庭経 こうていぎょう

孝女曹娥碑 こうじょそうがひ

生還於七門飲大淵道
我仙道與竒方頭載白

銘金石質之乾坤
后土顯照天人生賤死

。孝女曹娥碑 こうじょそうがひ

書かれた年代は黄庭経と同じらしい。曹娥の人となりを賞揚し、江に投じて父の屍を探し求めた當時の光景。・原文に「江水に投じ、父の屍を求め、或は沈み、或は浮び、洲や嶼の上にあるかと思ればまた激湍（げきたん）（はげしい早瀬）の中に身を没し、これを見る千人もの男子までが声を呑む有様であったが、遂に曹娥もまた水中に没し去り、五日を経て父の屍を抱いて水中に浮かび出た。……

孝女曹娥碑 こうじょそうがひ



孝女曹娥碑 こうじょそうがひ

永和十二年に書いたとあるから 黄庭経・孝女曹娥碑・東方朔画賛と同年代と思われるが、内容について

東方朔は漢の武帝につかえた人で、その事蹟や逸話は漢書の中にくわしく載せられている。東方朔は博達宏識、世にも稀なる偉人であり、気宇広濶で、大臣や宰相を見ること小児の如く、貴人高官も殆んど眼中になかった。然も自分の身分は賤しく、官位は卑くあつたが、それはむしろ自己の望むところで、それを以て憂いたむことなく、同僚を視ること草芥

〈ちりあくた〉の如く、高氣蓋世こうきがいせ（高尚な志気で世をひとのみにする）心を世俗の外に遊ばしめたとある。

王の小楷の四点をみると大体似かよったところがある。この四点はいわば楷書の元祖であり、すべて楷書の筆法がこの四点に含まれている。

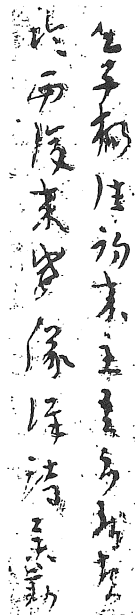
鍾繇せんじゆう宣示表（魏）



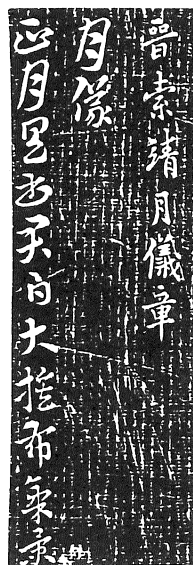
魏の国の鍾繇の宣示表（楷書）一五一―二三〇は、王羲之の細楷という説もある。「書風はゆつたりとして筆勢が大きい。これを習うと楷法の全部が身につく、大らかな情趣に富んだ楷書が書けるようになる。いわゆるおもしろくない楷書から脱却するには「宣示表」を習うようにおすすめた。」以上鈴木先生の説。また鈴木先生は「仮名を論ぜんとするものは、先ず第一に（十七帖）はもちろんのこと、空海の草書（金剛般若経開題）を習わなくてはならぬ。平安時代の仮名は、その源をこの開題に発しているものが多い。僕はこの開題を三十年近くならった：中略。四十年近く空海の書を習い、また王羲之も四十年ほど習った。ここ二十五年ほど良寛の書も習った。私の作品はこれらの方々（空海・王羲之・良寛）のものが混ざっている。」といわれた。天分に恵まれ努力の積み重ね、すぐれた作品をたくさん残し鈴木先生は国定教科書執筆、文化功労賞受賞、（日比野五郎先生、手島右郷先生）と昭和の三筆の一人にあげられている。

この四種の細楷が果たして羲之の真を伝えるものかどうかということは疑義のある所であるが。現在、展覧会に出品される作品を見ても小楷はほとんど出品がないようであるが。小楷はのし書き、賞状、写経などわれわれの日常生活にあるもつとも身近な書である。

図A 平復帖 （いふくじょう） 陸機 （りくき） 261〜303（呉）子揚往初来主吾不能尽図



図B 月儀帖 （げつぎじょう） 239〜303 張芝の姉の孫書簡の模範文



結び

空前の書道ブーム。これは四、五年前であったが、このごろは少し下火になったようである。それは指導者が多くなつたせいもあるらしいが。書道誌の数も大変多い。四十年前初学のころ、古法帖の釈文を探すのに苦労したことがあった。神田の古本屋で、百五十円の釈文を買ったときの喜びは今も忘れ得ない。今日大きな書店では書道コーナーがあり書の勉強にこと欠かない。また高校の書道の教科書を見て内容の豊富なのに驚かされる。前に述べたように王羲之の行書（蘭亭叙か集字聖教序か）と、草書はかならずどの教科書にも採用されている。

誰の書であれ、その人の書を理解するのには、その人の歩んだ道を考えるのが早道である。羲之にしても然り。彼が学んだであろう東晋以前の書を明らかにすることだ。西晋、魏、漢と遡ることによって理解が得られやすいと思う。書譜（しよふ）（唐の孫過庭の草書作、卷子本、中国歴代草書作品中の傑作、後世に与えた影響も大きい、正統的な草書基本学習上、王羲之十七帖とともに重要なテキスト）内容は王羲之を至高の書人として賞揚し、先行書論にしばしばみられる観念的なものでなく、文も書もきわめてすぐれており、書論の白眉といわれる冒頭に「夫れ古自り書（よ）を善くする者、漢、魏に鍾張の絶有り。晋末に二王の妙と称す。」

孫過程書譜 理論と実践を一体化した草書の名品

夫

自

古

之

善

書

者

漢

魏



これにより古よりの名家は後漢^{ごかん}図Bの張芝^{ちようし}、魏^ぎの鍾繇^{ちゆうよう}、王羲之^{わうぎし}、猷之^{ぎうし}があり、その書は皆絶妙だというのである。王羲之自身の言葉をこれにつづけて「このごろ名家の書をたずねるに鍾張は信に絶倫なり。其の余は観るに足らず」自分と比肩できるのは、この二人の書家だと豪語する。羲之の真蹟がないように残念ながら張芝も鍾繇も又真蹟のない巨像である。

西晋の目儀帖図A、平復帖図Bを見て隷書から楷書への移行の変化が見られ、行書や草書が日常通行体の中で、変化をくり返す過程がわかる。羲之はこういう時代の書体を書いていたであろう。しかし彼の芸術的な資質がこれで満足しなかったと思う。三国から西晋に書かれた章草体図Cの行、草（図Cは隷書を崩した早書き書体で書いたといわれる。漢から晋にかけて盛行した）を創意工夫により、洗練された不動の書体に完成させたのである。そしてこれ以降今日まで、羲之の行草をこえる新しい書体は生まれていない。

図C

漢代に成立した
古朴な章草



以上 王羲之の書の芸術的性格とその人間的性格との相關關係について考えてみたが、要するに王の書芸術は、東晋中期という複雑な時代を真摯に生きた、人間王羲之の豊かな思想と感情の表現であり、その芸術的偉大性は即ち王の人間の偉大性の自らなる反映であつたと見てもよいと考えられる。

真跡がない。そして王羲之尊重の歴史は揚模の歴史といわれる。しかし現在書の頂点に立つ王羲之、幻を追っているような氣もする。王の人間性、特異な生き方を通して考えられるのは、芸術に精進するものは夢のある方向を辿っていかなければならぬのではなからうかと思われる。書の研究はつまり書そのものに夢を託すると同時に、書道史にあらわれる時代の生んだ書人に対するドラマの演出をして研究をすべきだと思う。王は書に対する夢を追い続けた一生といつてもよいのではないか。

尺牘の孔侍中帖は真跡にもっとも近いといわれているし、集字聖教序は僧懷仁が蘭亭叙が埋葬される前の真跡を見て集字したといわれる。これら真跡に近いものを研究することによって王羲之の研究をすべきだと思うが。

しかし一朝一夕にして王の極致に達し得られるわけではなく、王とて時に安息し、その翌日は前日の満足はかき消されるものであつたに違いない。そして 生涯を終えて、予期しない労作のみ現存する特異を付与されたのかも知れない、それが芸術であろうと思われる。

王羲之、生年も不詳 幾多の傑作を残しながら 没年不詳 興寧三年（三六五）五十九歳ともいわれるが、果たしてどうか。幻の書人 王羲之 その方が、書聖の称号にふさわしい。

完。

参考文献

- ・中国書道史
- ・王羲之の書芸術
- ・王羲之を学ぶ
- ・中国の書の歴史
- ・王羲之尺牘集〔上〕〔下〕
- ・十七帖
- ・集字聖教序
- ・蘭亭叙
- ・中国書道辞典
- ・王羲之を中心とする法帖の研究
- ・書道基本用語詞典
- ・王羲之伝
- ・人と書
- ・王羲之尺牘
- ・十七帖
- ・名碑法帖通解 王羲之集
- ・明解書道史
- ・書の歴史
- ・六朝貴族の世界
- ・書の歴史 中国と日本

加藤達成

- 神谷順治 芸術新聞社
愛知教育大
芸術新聞社
中教出版
二玄社
二玄社
二玄社
二玄社
中国法書ガイド
木車社
中西啓爾
中田勇次郎 二玄社
中教出版
森野繁夫 白帝社
中教出版
安藤搦石 二玄社
村上三島 二玄社
藤原楚水（清雅堂）共著
小名木康佑
伏見冲敬 二玄社
吉川忠夫 清水書院
榊 莫山 創元社